

特261
170

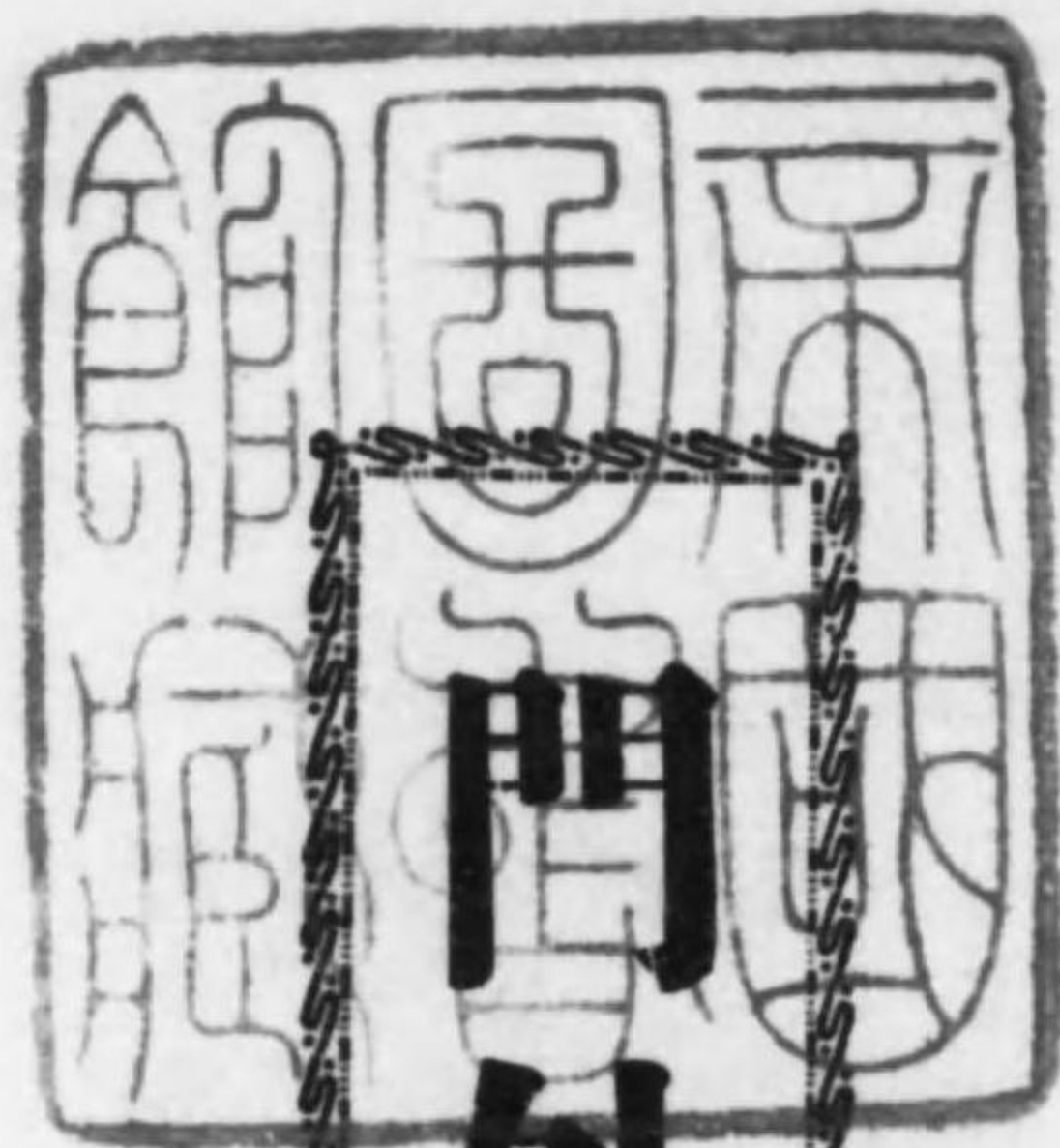
泥海古記
巻



始



特 261
1170



問外漢ニ禁ズ



序

此の眞しん々たから寶だい五ほ大う寶てん典てんは御ご本ほん席せきより河かは原はら町ちやう初しゆ代だい會かい長ちやう
深ふか谷や大だい先せん生せいが頂いたき、其その高たか弟ていに分わかちた、原げん本ほんをそ
の儘まま印いん刷さつしたもので金かねの力ちからで容たやす易やくも求もとめる事ことの出で
來きない、實じつに大たい切せつな我わが御おん道みちの生せい命めいとす極きまめて
尊たふとい寶ほう典てんであります故ゆへよく研けん究きゆうして末ま代だいの家か寶ほうと
して保ほ存ぞんせられんことを。

昭和二年十月廿六日

於御地場編輯者敬白

李時

真乃

乃公之

好

李時

李時

泥海古記 (泥海古記)

- 御神名方角 (挿圖).....
- 十柱の神天に現れての本心 (挿圖).....
- 十柱の神佛法七字の名號 (挿圖).....
- 十柱の神人体の御守護及四季の理 (挿圖).....
- 十二支の善歌 (挿圖).....
- 十二支の悪歌 (挿圖).....
- 甘露臺三十分の一 (挿圖).....
- 甘露臺の由來 (挿圖).....

五重相傳秘密の授け……………(挿圖)……………二

神心天降の由來……………二五

神の御古記……………三

人間父親種子……………四

人間母親苗代……………四

人間産みおろしの譯……………四

人体宿し込み七代……………五

人間開闢七代顯密……………五

世界八方御守護並に十柱の神……………七

甘露臺地場の譯……………六

神樂勤手踊の譯……………六

安産ゆるしの譯……………六

農事たすけの譯……………七

赤き服の譯……………七

甘露臺出てからの事……………七

御歌三十下り……………七

日本の古記……………八

第十七號御筆留

このよふは

のみくいの守護
もんじう
雲讀さま

ふ

きもの守護
げんを
國さつちさま

はじめさし

みよふなけ

りゆじんも

地の神さま

天神地神此の世のしん木也
天じんも

天の神さま

火なん水なん病なん
なにかく
七つの難を免がれさす

天だ
お助け頂くは天が臺なり

よふみてあるこのこと
よふめへも

にんげんのこらす
これみな

じよふどふ

神にはよふ見へてあるとのこと
ごこしたもふ
せ下さるなり

上の人間にしてやろふと仰
わ
れ
ら

おろかなる

仰せ下さらねば
ねがわぬとも
ねがわにや
我身のことは願はいても誠の心さへあらば受取て下さること

ありぬべし

三千世界は
世界のことでなく身の内のことなり心に思へば
口で言ふ手でするこれ三つが三千世界なり
多くの人よりくるで
をほいでぞ

たしかに

しよふじよふ
みさだめて

こゝろちがいのなきよふに
九十歳になり給ふた御教祖様の御心なり此御方は誠の御
心ゆへ我身はどうなつても人を助けたいとの御心其御心
見なろふて心違ひのなきよふにとのこと

目鼻耳手かいな足口どふたい

此の八ツを薬師如来ごもふします

男一之道具入れて九ツ
女一之道具入れて九ツ
これで九のごふごいふなり

右御文の外に十五年以前より月日二神の御心にて教へ諭し下され筆
先神の歌第一號より第十七號まで壹千七百餘首の御歌なり

戌、四
亥、五
子、六
丑、七
寅、八
卯、九
辰、十
己、十

よふこそこゝまでついできた

いづれのかたもてを引やわんならん

むほんのねをきる

なにかよふばがしやまになる

やまいのねをきる

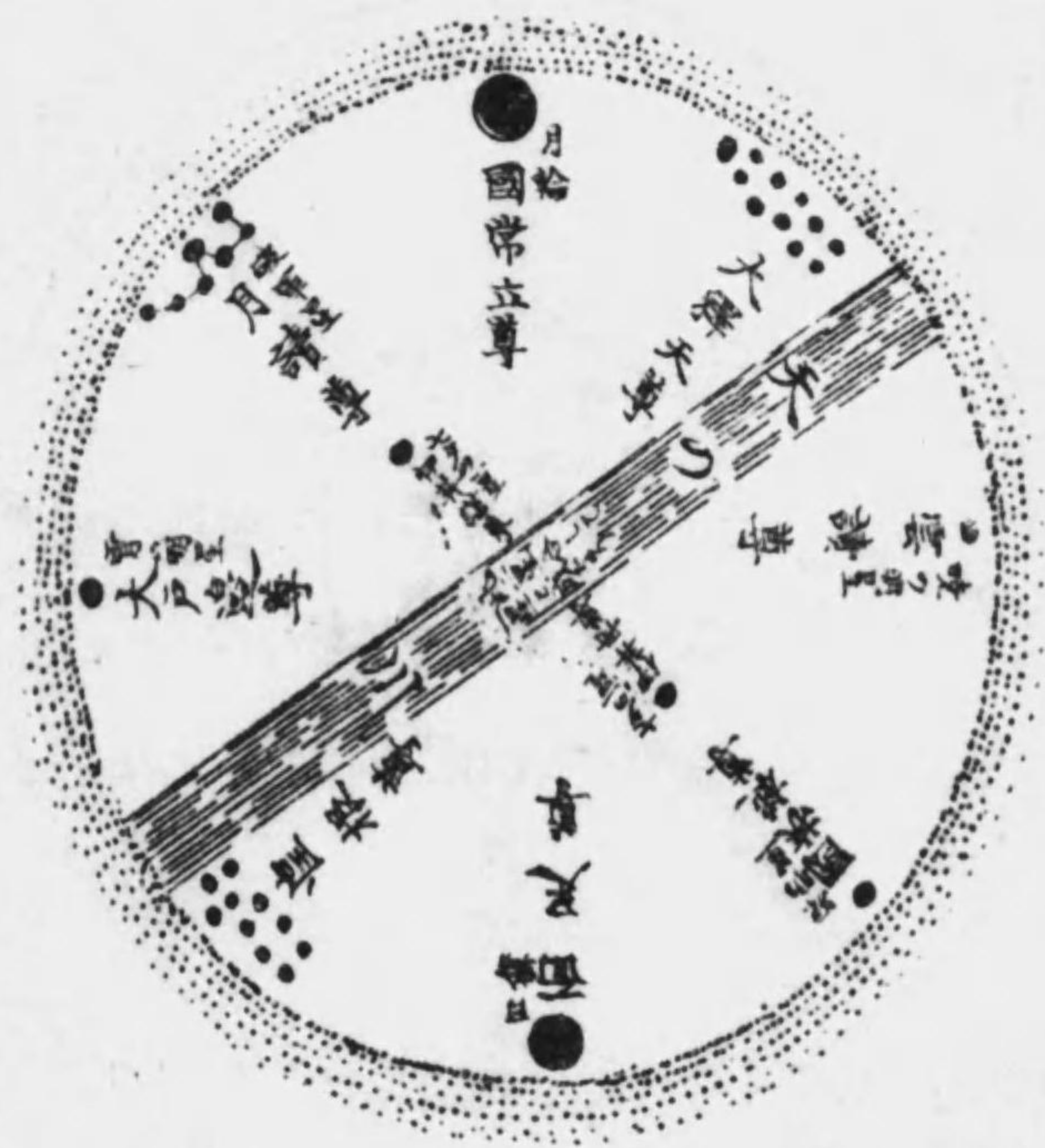
くがなくなる

ところのおさまりや

目録
御神名方角
十千及
十二支を
書記す

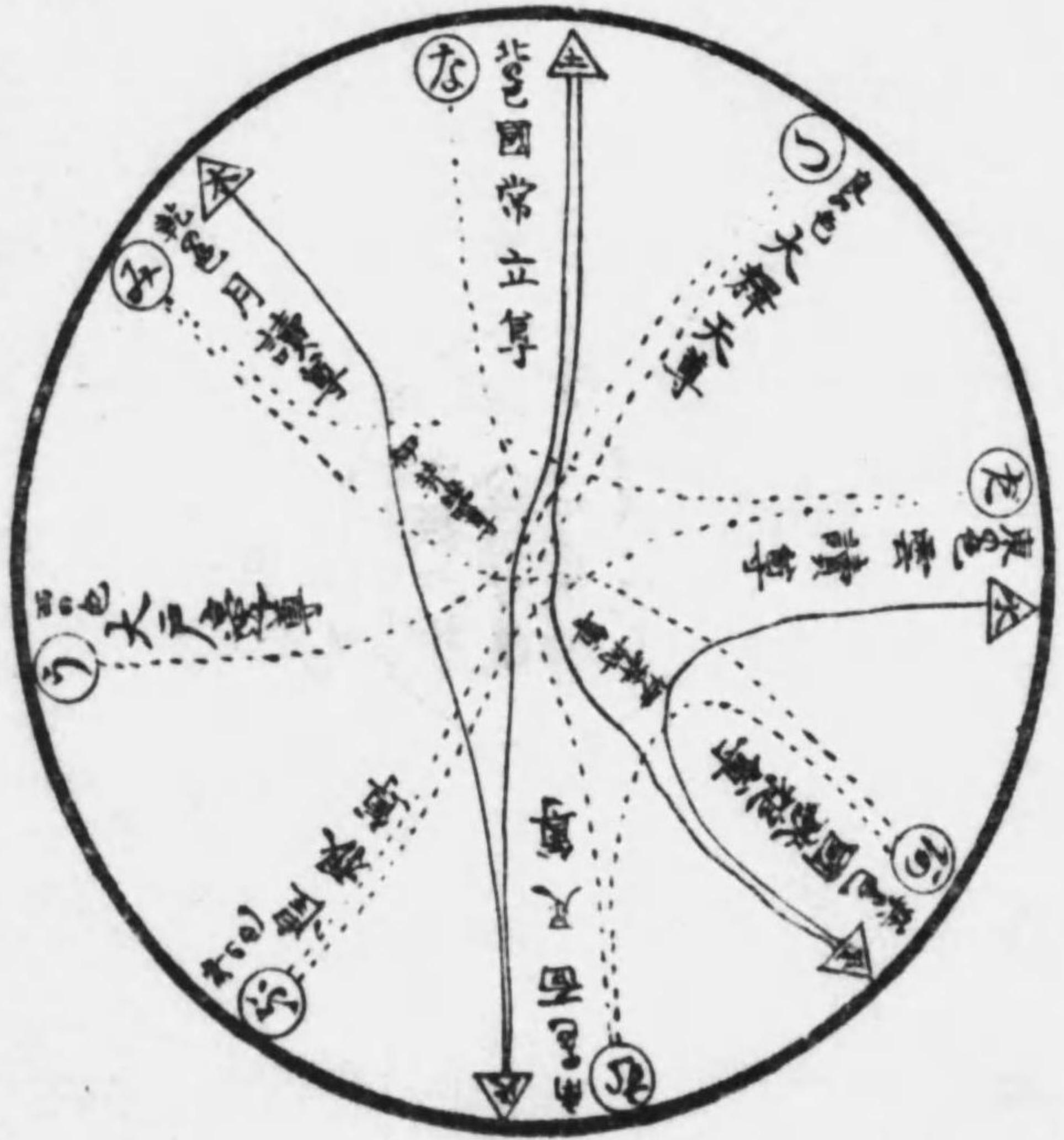
録目
 又之天十
 書天村に樹
 記の心願殿
 す川に墨水神

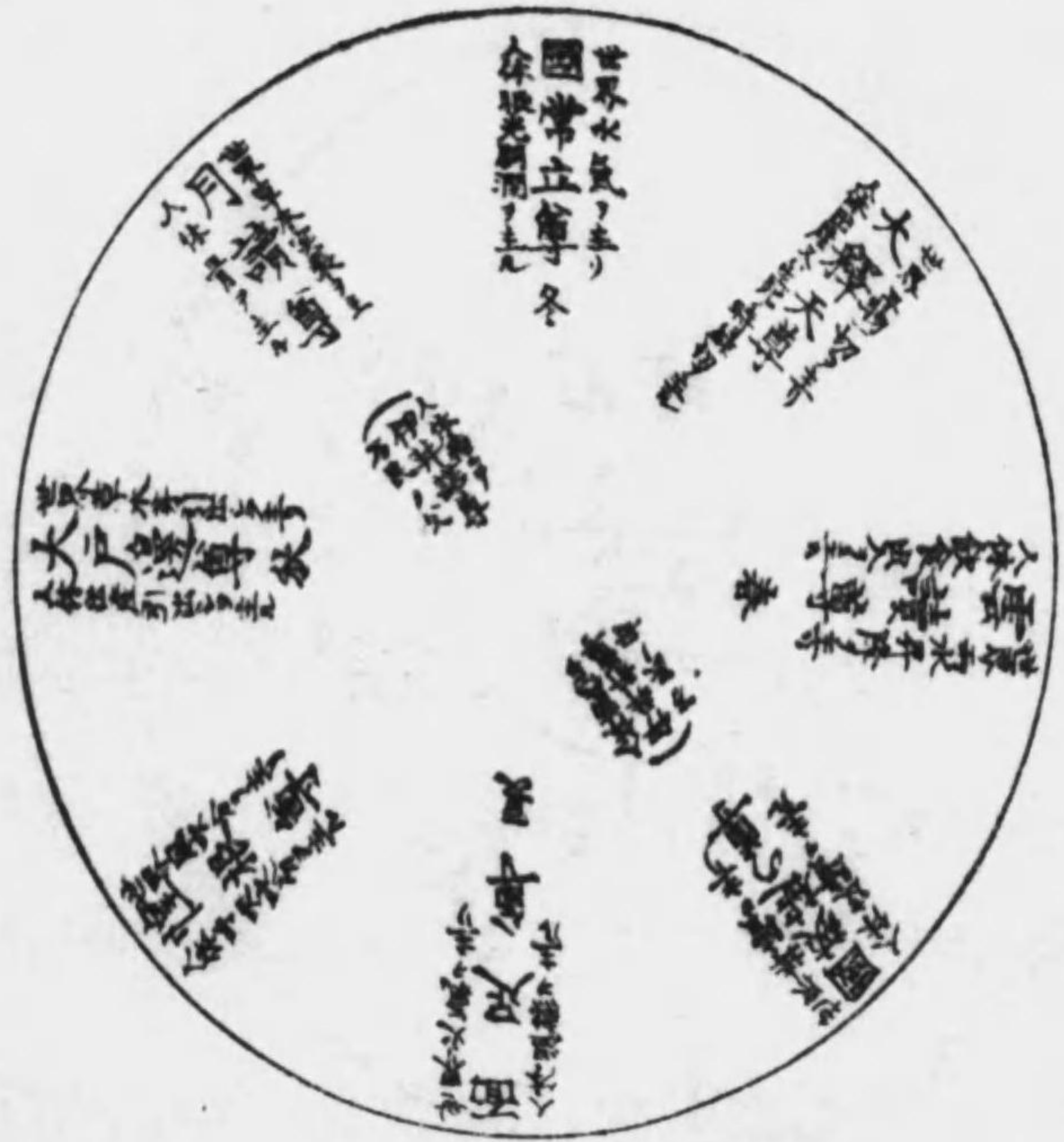




目 十柱の神
 佛法七字の文
 五輪五林の
 録 何守護
 又諸方角

目 十柱の神
 人体御守護
 又四季の
 理順を記す



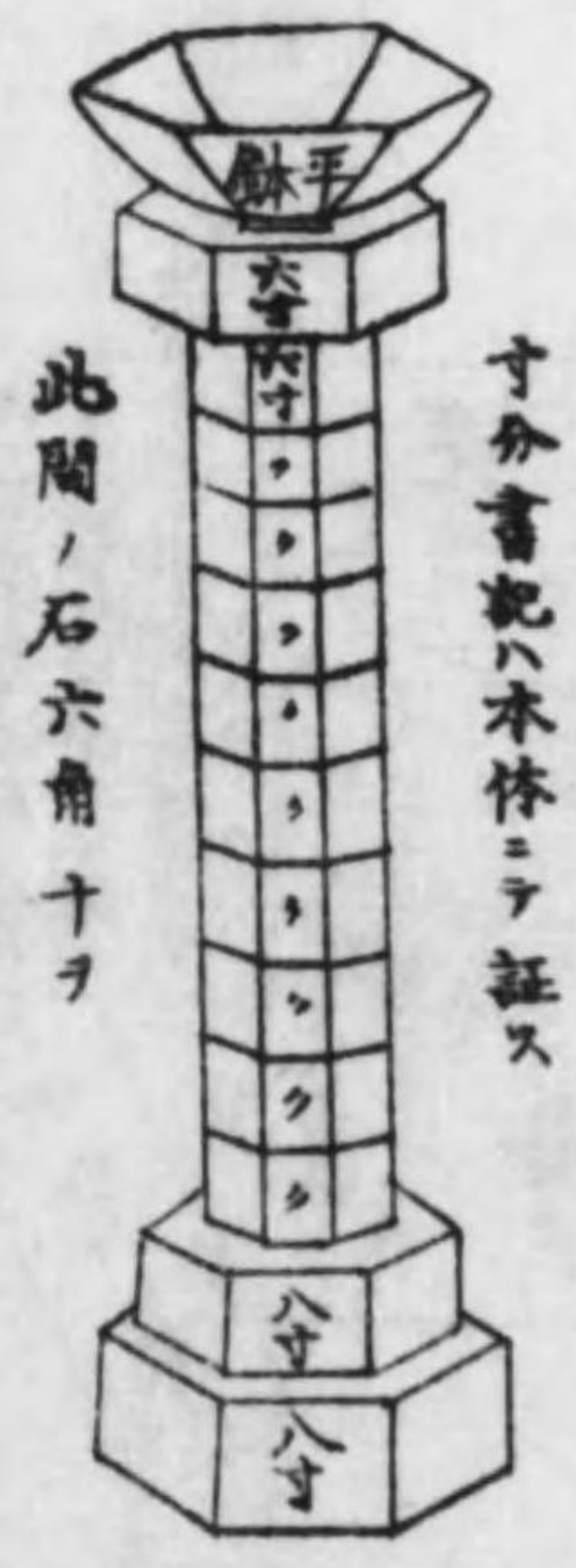


甘藷餅

甘藷餅を平鉢の由来
 此上に赤井入の平鉢と載
 せは即目五分の理に
 七五性入也又ニ寸四寸の火
 にて五分の
 人間生る
 理なり

三寸一分の圓

かんろすだいの由来
 寸四分合四毫七十分
 八分のりも
 六角三分に三寸外圓を
 より八分のりも
 二三毫合八分のみ
 六角十は寸四分合
 用一茶味長八寸三寸す

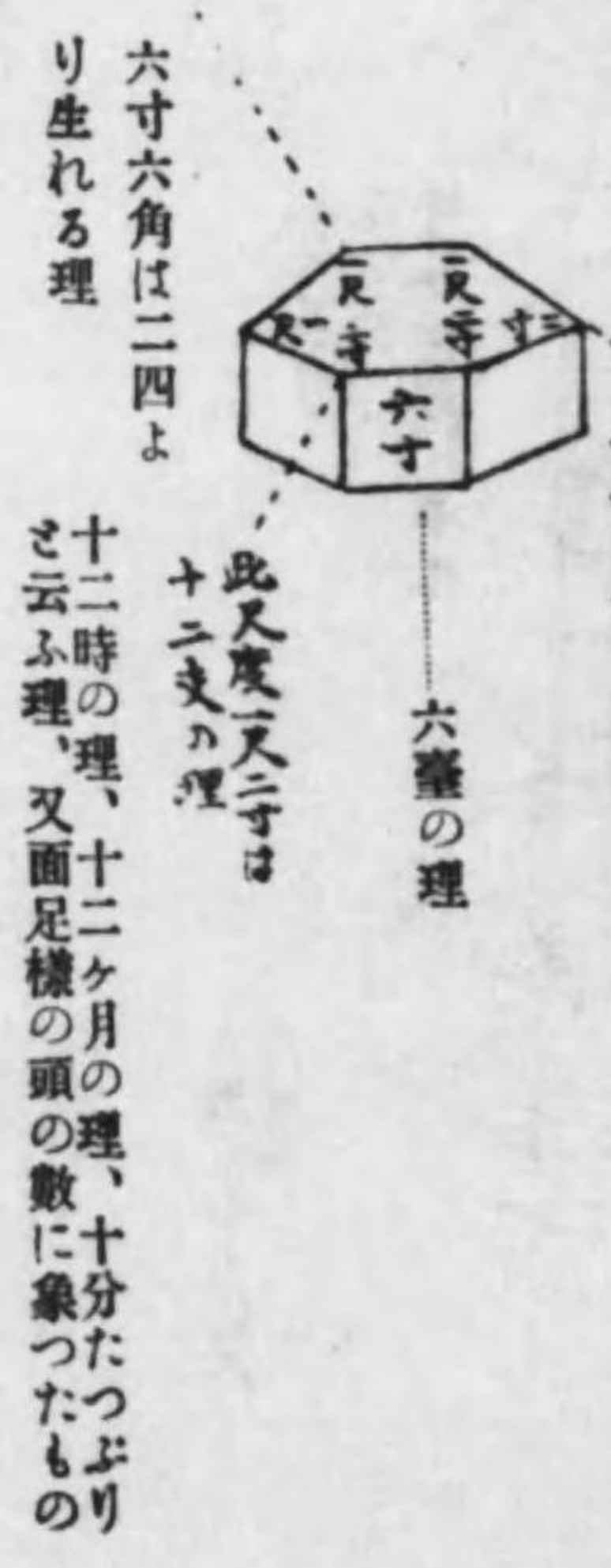


寸分書記ハ本体ニテ証ス

此間ノ石六角十ヲ

甘露臺石寸を書記す
又石寸にて其の理を證す

甘露臺の惣高さ八尺二寸にし、石十三積上たる理は十分身(三)につくの理、
又八尺は八方弘まる理二寸は、たつぶり云ふ理。
此の石十枚積たる
は十柱の御神の理



六寸六角は二四より生れる理

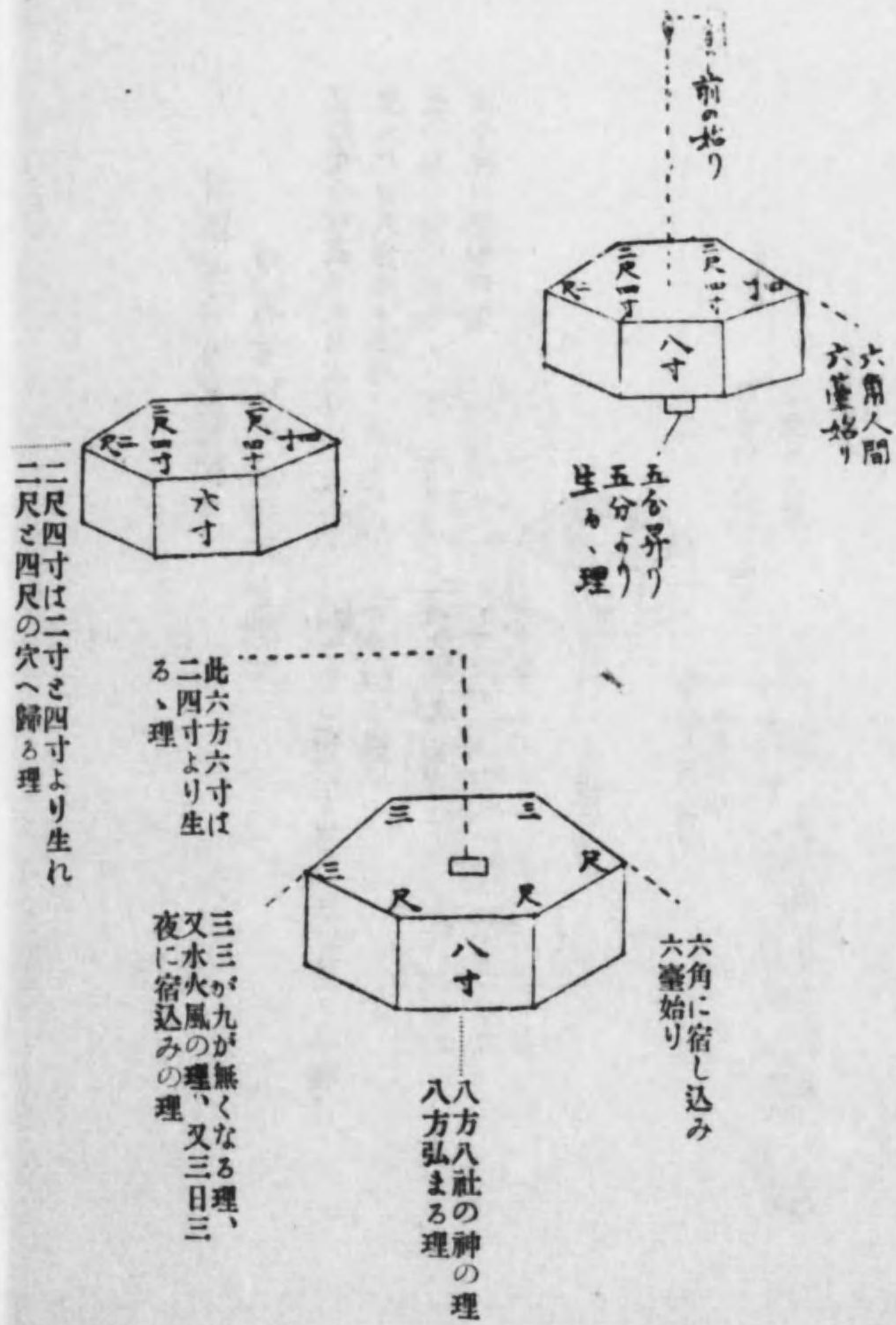
十二時の理、十二ヶ月の理、十分たつぶりと云ふ理、又面足様の頭の數に象つたもの

此又度二尺二寸は十二支の理

六臺の理

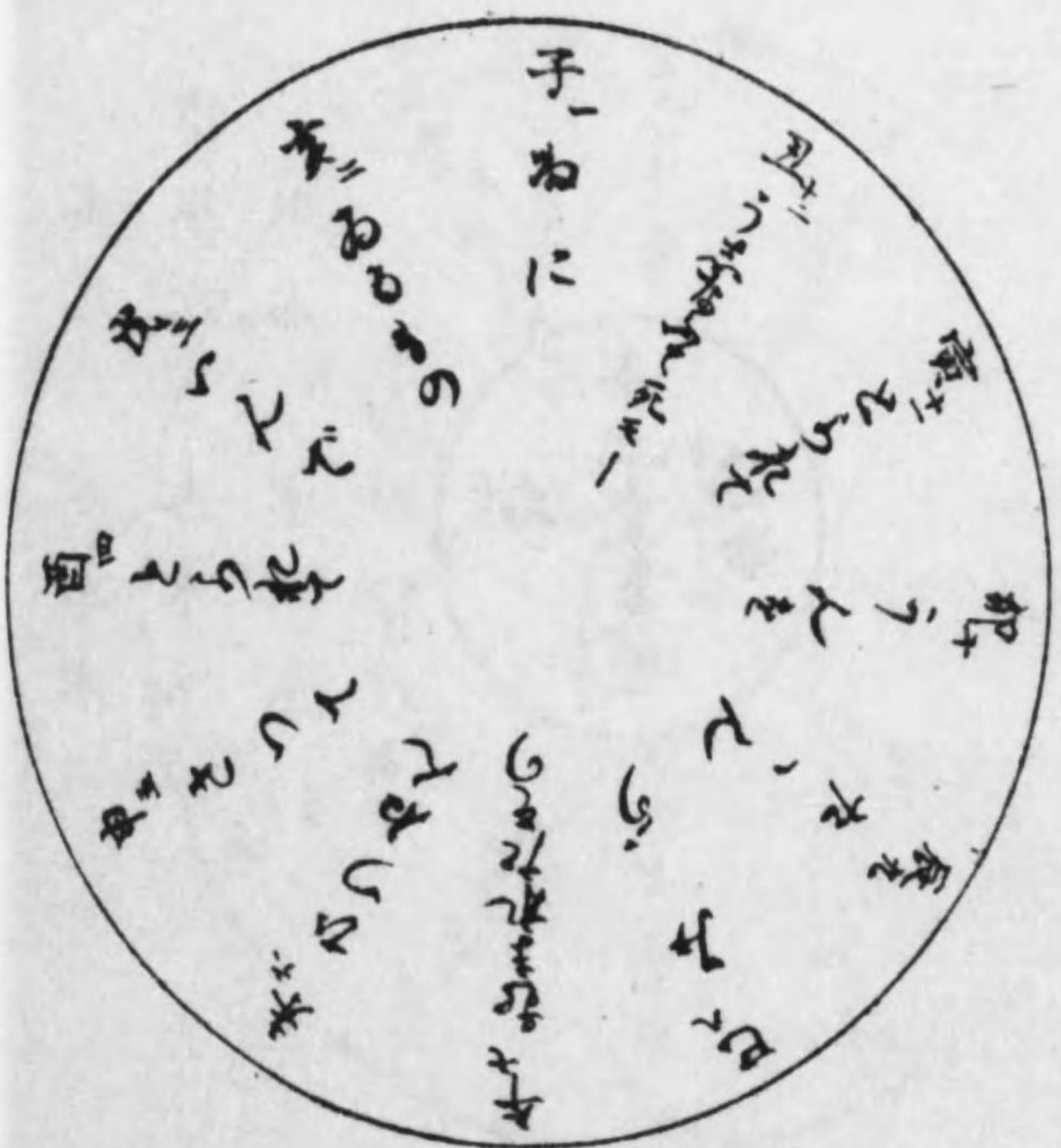
此又度二尺二寸は一年十二月の理

十二支表順
 左
 善歌



右
 十二支裏逆
 悪歌

子わさ
 丑のうら
 寅のうら
 卯のうら
 辰のうら
 巳のうら
 午のうら
 未のうら
 申のうら
 酉のうら
 戌のうら
 亥のうら



納鳥田 水水 木木木

鳥田 水水 木木木

土鳥田 水水 木木木

三千世界みなとりて 三千世界たすけさす
水七鳥 田

すみきりたならなにもゆふこそない

きはこゝのゑへをさまる

木 九 納

にんげんのあたまのうゑにうづまきがあるうづまきがお月様にんげんのみけんのほくろお日様そこで阿彌陀如來のあたまにはうづまきがあるみけんにはほくろのようなほしがあるそこでにんげんのあたまやみけんをはるここをつゝしむべし。

月日二神

あたまのうへのうづまきをびやくこうぞふごいふなり
みけんのほくろをにつきそふごいふなり。

五重相傳ニ於テハ初リニ御十念ヲ十遍
南無阿彌陀佛ト授ケル八十柱ノ神ヲ拜禮スル事ナリ
にんげん首よりうへに五重相傳の秘密の授あり其の譯左にしるす



かみのみこころあまくだ
神心天降りの由來ゆらい

抑々おさく天理王てんりわう之尊のみことと稱しょうする其その元もとは大和國山邊郡生屋敷村やまとのくにやまへづのりしやうやしやうけむらと申まをする
「現今三嶋」いままみしまその村むらに中山善兵衛なかやまぜんべゑといふ人の妻つまにみきといふ人あり
その人は若年わかねんの砌みせりより信心しんじんけんこなる人ひとにして日頃念佛ひごろねんぶつの行者ぎやうじやまた又
は難造なんぞうなる人ひとには助けする事ことをこのみ慈善じぜんふかき人ひとなり。則すなはちみき
當たう三十二才さいしゆつさん出産しゅつぷんするたびごごに、ち、充分じゆぶんにして隣家りんかのち、ふじゆ
うなる人々ひとぐへは兩三人りやうさんづゝもあたへ、たすけする其そのうちうちに同村安
達源左衛門ちだげんざゑもんの一子しち當たう二才さい也照之亟あてのじやくといふ男子だんし、一人ひとりをば養育やういくするを
りから其その子こほふそ病びやうにかゝり十一日じゆいちにちのうちにくろぼうそと變へんじ尤もつと

も醫師兩三人を迎へ立會のうへ種々療治に手を盡し候得共其のしる
しもなく全快相成らずと見へて申すに付き我、養育中に死亡させて
は何共云ひわけがなきこと、それより我夫へもかたらず所々の氏
神さまは云ふに及ず天地神明を拜み此のたび我養育する男子照之亟
がなん病すみやかにぜんかいまする事を一心にせる願するに曰く、こ
のたび我養育する一子照之亟の命數つきたる事にて全快いたし難き
時は我が養育する故さぞかし兩親のおもゐやりするところもあり
ぬべし且又うれゐいかばかりか、就ては我が心勞もむなしく相成る
故に何卒無理な願ひなれ共爰に我子三人ある内そふりよ男子一人を
ばよけあこの二人の命數を速に天に備へ此の二人の命數を以て預り

子養育する男子照之亟の命數つぎかゝ下され度、尤も預り子病氣
全快のうへは本人へ八十歳までの命數を下されたく、もし二人の命
數にて不足する時は此の願望成就のうへは速に我が命も天へ備へ申
ますご一心不亂に願をかけ、其の外奈良二月堂の觀音稗田の薬師へ
も前文の如く頼み一心不亂にさせいするここに、則ち七日七夜にし
て右預り子照之亟のなん病、速に全快致しその人安達氏の家名を相
續して明治の今日に至りて尙存命なり、然るに其る後の年に至りて
二人の女子のうち娘やね四歳にて死亡す、それより又きみ三十四歳
の時くわいたいして月みちて女子を産む、其の子つねさいふ三歳に
至りて又死亡すこれ先の女子の心魂を天よりやごしこみ二人を一人

づ、二度に死なさせて一人を助け給ふ事なり。然るに其後みき四十
 歳の時天保八年酉十月廿六日に至りて長男善左衛門農事致し居る、
 にわかには、足痛み歩く事相成り難くに付き早速醫者を頼みて療治を
 させたれども、全快ならず然るに同國山邊郡長瀧村に山伏市兵衛と
 いふ行者あり則ち此の人を招き、ごまをたき、かじをなせば、あし
 の痛み少し平癒するゆへ同人を雇ひ一ケ年のうち十ケ度も、かじを
 する然るに翌天保九年戌の十月廿四日の日よりかじをはじめて、み
 き幣を持ちて、にはかにむちうご相成り神のおさがりあり、いかな
 る神と伺ひ申すにわが神は天の照護なり、此の度これなるみきの身
 体を神の社と貰ひ受けたく則ちかじをちなみにして天降りたるな

り、みきの身体速かに神に貰ひ受けたくしとおほせらる、故皆の者は
 誠の神とは更に思はず只狐狸のつきし事にやご俄に親族を集めて退
 去させんといろくに力を盡すも難もかなわずにつき則ち夫善兵衛
 始め親族の人々もいかゞ致し難き故神へさしあげると申せば神の曰
 く其の方等如何に心を盡すも難もなかゞしりぞく神でなし則ち今
 日よりみきの身体を神の社に貰ひ受けたる上は此の方の儘にして、
 これより三千大世界になきめづらしき人間助ける事を教へて則ち神
 の社とするなり、尙此の屋敷も神に貰ひ受たく此の事不服ならば此
 のやしき、だんぜつするこの事なり依て本人みきの身体はいふに及
 ず屋敷もろとも速に神に備へ奉るご申上れば夫よりみき正氣と相成

りこれより二日すぎて十月廿六日の夜中に至りてみきの居間の天井にはかになりひゞき高き聲にて神の曰く、我神は天の照護國常立の尊といふなりと計りにて上りたもふ、又暫くして前の如くなりひゞき高き聲にて神の曰く我神は天の照護面足の尊と云ふ神なり則ち我が元の姿を顯せば恐るべし、まづ國常立尊と申すは天の月様と御神心をあらはしたもふて御姿はかしら一つ尾一つの大龍王なり則ち、にんげん世界萬物をこしらへ水土を主宰なさる神なり、我神心は天の日輪と神心を顯して元の姿は頭十二、三つの尾三つのけんある大蛇神なり則ち世界人間萬物を作り火の靈を司る神なり尙此の人間萬物を作り成し時によせて使ひたる八柱の神がかわるゝくに天降ると

の仰せにして上りたもうなり、それより何時となく月日二神よりお話しあるには元ごろうみ中にあらわれて人間や世界を拵へたる時に人体の道具雛形に使ひたる神あるなり則ち此の屋敷地といふはごろ海にて人間を始めて陰陽夫婦の道を交り地場のいんねんあるゆへに天よりこれをみすまして元始りの約束にて、いま世界の年限みちたる故にみきの魂は則ちにんげんを造りし時の母の雛形に用ゐたる、いざなみのみことの魂を授けたるなり、今世の中に我が子程かわい者はないそれに我が子二人をば他人の子供の爲めに命を天へ備へあまつさへ我命をも捨る心底を見るに則ち世界中人間最初のおやにてあるゆへにてかわいが一條の心なり尙元の道具に用ひたるみき魂此

のやしきにて人間を産出したる、夫れを天より見定めて天降りたる
うへは神の自由なりと爰に依て神のいふ事を守るべし此の上は神よ
り至極貧苦におこすなりと仰せに家内の人々申すには左様なのじく
する神なれば誠の神にあらず片時もはやく退去させんごひそかに親
族を集め連日相談を遂げ則ち當時は藤堂和泉の守殿の領分にして其
の役人を頼み神をのけさせん事を頼み同國別所村に住居する萩原某
福住村に住居する勝田兩人に外に兩人同道にて推參しごもくくに神
を退去させんご色々様々に手をつくしたれごも中々おくする事なく
せめし人の身体自由になりがたくに付き萩原勝田の兩人も大るに感
服しこれかならず狐狸のつきし類にあらず誠の神なりと申して各々

歸村せしなり、如斯なる故に親類一統今日後は一切不附合と申すに
付きみきも數度責められるを困難して井戸或は溜池等へ身を投んご
其の場へ近付き身を投げんごせば我身体少しも自由ならず致しかた
なく身投る事止る心ごなれば元の如く身体自由なり又身を投んごせ
ば以前の如くなるゆへに不得止立歸る事再三なり且神の御告には一
家内の財産を悉く人々に施すべし然る上は三千世界の中になき珍ら
しき助けの道を教へ始めるごの御告なるが故に神の命を守り財産并
に建物まで悉くほごこしするなり則ち此の間十ヶ年の内にて相當の
百姓であれごも神の告を守りれいらくするなり然る所此の後に至て
只何ごなく人々が天輪王の命ご申して追々他所より人々來りて難病

等を助け下さるごいふに付きみきより神一條の咄し人間元始りしん
じつの道理を論し其の説論通り疑心なく人道を守る心を戒て謹むな
らば不思議と病氣全快するがゆへに追々傳へ來て數多の人々が參詣
するに付き以前の役人より藤堂殿へ言上して則ち京都吉田神祇所よ
り參詣所を差許しと相成しよし夫天輪王尊と云ふは月日と八柱の神
を一度に稱名するなり。

中山みきの魂心天理にかのふたるを以ての事なれども人間に神名
を授る事ならざるゆへに此の屋敷地面は元始りの泥海なるゆへに地
名に天輪王の尊と授け下さるなり。

神の御古記

此の世の元なるは月日と云ふもなく人間もなく世界もなく只泥海
ばかりなり。其の中に獨化の神二神あり、これ今日の月様日様これ
なり月と日といふは國常立尊なり御姿は頭一つ尾一つの大龍王にして泥
海中よりあらはれまして國床を見定め給ふ故に國常立の尊といふ理
なり又日といふは面足之尊と申すなり、御姿は頭十二尾三つあり三
つの劍ある大蛇神なり則ち此の二神曰くには泥海中にてゐるばかり
では、たれが神と云ふて敬ひする者もなく氣のいずみある事なり、
故に爰に人間といふ者を捨らへ其の上に世界を始めて人間に神がい

三六
りこみて物事をおしへて守護せば陽氣遊びそのほか何事も見らるゝ
事ご二神相談定まりて此の人間を造るには種、苗代、道具、雛形なく
ては叶わぬご道具雛形を見出す模様ご二神天より泥海中を見すまし
て今なる子の方に當りてぎいぎようふごいふ魚がある今世にん魚
ごいふものなり、またいまなる午の方に當りてみがあるこれ白蛇な
り此の二つの者をみるに、其の心誠にただしきものなり、ゆへに其
姿ご心を見てこれを引きよせて人間を造る種苗代雛形ご貰ひ受けよ
ふご相談ましまして則ち右二つのものを引よせて二神曰くには此の
度其の方たちの姿ご心を以て人間の種苗代雛形にもらい受けたく然
る上は人間世界を拵へて天地開闢なしたる上は人間より此の二つを

世界一の神ごし尙人間の親神ごいふて禮拜さすなり、又世界の年限
經ちたるならば因縁の地場へ人体ごして産出し陽氣遊びをさするご
の約束にて右二つのものを貰ひ受け速かに神名を伊弉諾伊弉册ご授
け給ふなり、夫れより男女一の道具五体の道具人間自己の魂を見出
す模様ご相談ましまして二神泥海中を見すまし給ふに今なる戌亥の
方にあたりて一物あるこのものへんにしやくばりて突張の勢ひ強く
これ今世にしやくばりほご云ふ魚なり此の者を引よせて承知をさして
貰ひ受け、たべて心体味をみて男一の道具に定めて尙人間骨の道具
ごする故に此の理を以てつきよみの尊ご定め給ふ、また今なる辰巳
の方に當りて一物あり此の物は皮強くこけぬものにて國の床にひつ

あてている物にして今世にある龜なり、此の者を引よせて承知をさして貰ひ受け其の心味を見て女一の道具と定め尙人間皮つなぎとする故に此の理を以て國狹植の尊と名づけ給ふ。又今なる東の方に當りて一物あり、此の物頭の方へも尾の方へも自由に出入をする勢い強く惣体ゆたかにしてぬるくごしてぬめりのある、これ今世にうなぎといふ魚なり、此の者を引寄せて承知をさして貰ひ受け其の心味を見て人間の飲喰出入をする道具とする尙世界雨水昇降道具と定給ふ此の理を以てくもよみの尊と名附け給ふ、則ちこれを以て五体の道具とするなり。尙人間呼吸吹分する道具を見出す事とそれより二神泥海中を見すませば今なる未申の方に當りて一物あり、此の物身

薄き姿にてあるゆへに能く風を生ず、これ今世にかれといふ魚なり其の物を引寄せ承知をさして貰ひ受け心味を見て、人間にいき吹きわけの道具とする也、尙世界風吹分の道具とす此の理を以てかしの命と名を付け給ふ此の上は人間の一に樂む食物をば第一とする此の食物地より引出しの道具雛形を見出す事を相談ましまして泥海中にて今なる酉の方に當りて一物あり此の物至極、引力強くきれぬものなり今世にある黒蛇にして此の物を引寄せ承知をさして貰ひ受け其の心味を見て五穀草木地より引出すの道具を見定め給ふなり故に此の理を以て大戸の邊命と名づけ給ふそれより人間生涯の時にのぞんで縁を切る道具なくては叶ぬ事と見すまじ給へば泥海中に今な

四〇
る丑寅の方に當りて一物あり、此の物至つて大食する心にて腹袋大にしてよくあたりきるの勢ひあり、これ今世にあるふくさい魚なり則ち生死たちきりする道具に引寄せ承知をさして貰ひ受け其の心味を見て右道具と定め給ふなり、以上これにて道具雛形揃ふなり夫れより月日二神御相談なされて人間壹人づ、自己の魂を定め給ふみすませば泥海中上面一れつごじよう斗り、此の物かず九億九萬九千九百九十九筋の三寸の土生なり、これを月日二神引寄せて其の心味を見て人間自己の魂と定め給ふなりこれを神集め給ふて神ばかりにはかり給ふさいふて今世にも神道大祓もようさいふなりこれにて月日二神は相談きまり付てこれよりにんげん陰陽夫婦和合やごしこみ

はじめ給ふ其の譯左に記す。

人間父親種子

いざなぎの命へ男一の道具とてつきよみの尊を仕込み給ひて是に國常立の尊の御神心入込して父となし給ふ。

人間母親苗代

いざなみの命へ女一の道具とてくにさつちの尊を仕込み給ふてこれへ面足之尊の御心入こまして母となり給ふ。
以上六尊六代を始めとして泥海中より九億九萬九千九百九十九人

の人種をなむく、二人づ、三日三夜に宿し込み給なり則ちやごしこみ、すみていざなぎ起き立ちて向ひたる方を北ご名付け給ふなりいざなみ後より起き立ち向ひたる方を南ご名付け給ふ又二神宿しこみし時向ひたる方を二神のしんごいふ心にて西ご名付け給ふなり、神の目も眞なり、人間も兩眼は眞なり眞の向ひたる故なり又東ごは天地開闢して二神晝夜に行道したまい日に日を西へかすゆへ日ごしご云ふを東ご名付け給ふなり、爰に於て諸册の二神やごしこみすみて天の岩戸に三年三月の間ごまより泥海中へ産おろしたもふなり因に言ふ天の岩戸に三年三月止り在間二尊の胎内の子數成長する胎内より飲食の神の御守護なり之則ち雲讀尊の守護なり以上七

尊を天神七代ご言なり七代ごは七ツの道台なり、此の天の岩戸ごいふはごろうみ中の事にて今大和國山邊郡生屋敷村中山氏のやしきの地面なり又宿し込みの地場は今なる中山氏のやしきのじばのうち、此のたび甘露臺をすゑる處のよし月日二神の御嘯しなり。

人間産みおろしの譯

先づいざなぎいざなみの二神九億九萬九千九百九十九人の種を胎内へやどり三年三月の其の間たいやうなし給ふて天の岩戸よりあらはれましていざなぎの命よげながしてさんばをなして、まわり給ふてそのあごよりいざなみの命うみおろしたまふはじめは今なる大日本大和國奈良はせ七里四方を七日かゝりて産おろし給ふ、あまる大和國中へは四日かゝりて産おろし給ふそれより山城伊賀河内の三ヶ國の地場へは一ヶ國六日目六日目にて十九日にて産おろしたまふなり、都合三十日にして四ヶ國へ胎内の子數半分を産おろしたまふ殘

る日本國中へ四十五日かゝりて産おろし給ふ、合して七十五日のあ
いだにて九億九萬九千九百九十九人のひとかずをのこらず産みおろ
し給ふなり、國々にいふ、いまのにんげんの安産して六日をへて六
日だれこいふて呼名をつける祝ひをする事は一ヶ國六日にて産おろ
しの理を祝ふなりまた大和國は十一日だれこいふて國一統祝ひする
もさいしよの十一日の産おろしの理なり、又三十日を半おびやこ云
ふはいざなみの命胎内の子數半分を四ヶ國へ産おろしたる理なり人
間も元の親神の御苦勞をなされし通りにするなり則ち七十五日たて
ば親ののみあけこいふは七十五日にて胎内の子數を産おろしたもふ
理を以ての事なり、則ち産おろしのにんげん五分なり、此の人間を

ば、いざなみのいきをかけて養育したもふ九十九年のごしを経て三
寸ご成長する時にいざなぎの命も逝去したまふ、またもや、にんげん
ごごとくく死去するなり、これよりいざなみの命の体へ一度おしへ
たる守護にて又元のにんげんをやごしこみ、これよりまた、天の岩
戸に十月のあいだごままりて以前の如く大和國をはじめごして日本
のじばへ七十五日の間に右にんかすを産おろしたもふなり、これも
五分から生れて九十九年のごしを経て三寸五分ご成長するなり此の
養育をいざなみのいきをかけて成長するなり、爰に至りて皆々死亡
するなり。それよりいざなみの命の胎内へ又もや元のにんかすやご
りかゝりて此の度も十ヶ月の間は天の岩戸にごままりて以前の如く

大和國を始めとして日本國中の地場へ七十五日にて右にんかずを産
 おろしたまふ、これも五分から生れて九十九年のこしを経て四寸こ
 成るなり此の養育は伊邪那美のいきをかけて成長するなり、爰にい
 ざなみの命も此の通り漸々成長するならば末にて五尺の人間と相成
 る事につこり笑ふて逝去し給ふなり、則ち此の人間もつゞいて残
 らずみなく死亡するなり、始めより三度いざなみの胎内へ宿り込
 みたる理を以て産後といふなり。ちなみに云ふ最初産おろしの地場
 は今なる所々の産土神なり大神の地となる故に一宮といふ、二度目
 の産おろし地場は今なる所々の墓所なり故に二墓といふ三度目の産
 おろしの地場は今なる所々の山々の神社佛閣の地場なり三ばらなり

これよりは九億九萬九千九百九十九人の自己の心魂をば鳥畜類むし
 けら種々様々のものゝ變化して八千八度生れかわりたる理にて人間
 は萬物動物のなりわざは何事のまねもするなり此の間變化中の年限
 は尤も泥海中の事にして九千九百九十九年目に至りて右死亡するな
 り則ち人間のつなぎとして女猿が一疋残るなり、これ人間皮續ぎ女
 一の道具につかつたる國狹槌の尊の變化する處にして導の神なり、
 此の女猿の胎内へ男五人女五人都合十人宛やごしこみ給ふなり十人
 の男女生れて、これも五分より生れて、だんく成長して八寸こな
 るなり、其の時泥海中に高低でけかけたり、則ち八寸の男女十人がま
 じはりて一腹に十人づゝ男女を産出して又もや元の人数、生るゝな

五〇
り此の時に至りて人間は一尺八寸と成育するなり、則ち人間成育するに應じて天地世界もわかり此の時泥海中の水土わかりたるなり、これよりして一と腹に男一人女一人と定まりたるなり。人間三尺と成長したる時に至りて天地海山ひらけて、はじめて人間も言葉を發するなり此の三の理を以て今人間も三歳にならねばこそは語りも、しかさわかりがたきも此の理ゆへなり、これより人間成長に及びだんくたへもののあるかたへごくいまはり、からやてんじくの地場へのぼりゆき外國へものぼりゆくなり、爰に天地全く開闢して世界八方八柱の神が神守護下さるなり則ち人間も泥海中をはなれて五尺と成長して陸地に住居いたす事なり元の人數九億九萬九千九百九十

九人の内始め大和國中へ産おろしの人間は今日日本國中の人種なり外日本國中への地場へ産おろしたる人間は外國の人種なる故に皆々兄弟たるべし則ち日本は根なりからやてんじくは枝なり外國はさきさきの枝葉なりゆへに珍らしき事物はこの理にて月日二神が花や實として枝先きにおしへ給ふと雖も皆々我が日本の國へかゝりくるなり故に大和、日本、神形眞國と云ふなり則ち最初泥海中より五尺と成長して陸地に住居するみちすがら世界中にしりたるものはさらになし此の度も月日二神元始りの地場へ天降りあつて御嘯し下さるごいふは此の世の年限充ちたるがゆへの事なり此の年限、ごろ海中の間は九億九萬年なり五尺の人間となりては今より四十九年前明治十九

年よりあこへ天保九年成の十月廿六日朝五つ時に至り九億九萬九千九百九十九年にて一トたてご相成り其の内六千年の間は人間へ物事を教へ下され此の六千年の間をば日本にて神代といふて人間も皆命名を用ゐたるなり、これより人間智覺をまして慾心を生じ惡氣さかんとなるゆへに元はじめいざなぎの尊の神体を人体と變化ましまして神武天皇とあらわれましまして惡人をせいし國中を治め政事を始めを萬民おさめ國王を定め始め給ふなり。

人体宿込七代

のみに	をん	だう	なほ	にん	にん	はち	ちん
出飲	道女	道男	苗人	種人	種人	母地	父天
入食	具一	具一	代間	子間	子間	面	國
雲	國	月	伊	伊	伊	足	常
讀	狭	讀	莽	莽	莽	尊	立
尊	槌	尊	册	諾	諾		尊
	尊		命	命	命		

人間開闢七代顯密

ひかりとうるほひ	にんげん	光潤	國	常	立	尊	な	久遠	釋迦	尊
ぬくもこいまほひ	にんげん	温勢	面	足	尊	む	三尊	之	彌陀	尊
かわつなぎ	にんげん	皮間	國	狹	榎	尊	普賢	菩	薩	
ほねがら	にんげん	骨格	月	讀	尊	み	八幡	大	菩薩	
のみにひていり	にんげん	人間	飲	雲	讀	尊	文珠	菩	薩	
い	にんげん	呼	間	惶	根	尊	大日	如	來	
は	にんげん	齒	牙	大	食	天	尊	つ	虚空	藏
									菩薩	

以上七尊七代は一代一身に具備するなり。

世界八方守護並に十柱の神

北子の方

水土常立尊

丑寅の方

切事主 大食天 命

東卯の方

雨水昇降主 雲讀尊

辰巳の方

接續主 國狹槌尊

國久遠見	地千手	二虛	鬼橋	縣橋	日傳	文龍	親神	普賢	黃辨	結摩	達
見定	觀音	空	子月	來聖	神妙	珠如	師知	賢上	財	摩大	師
尊	薩	堂	天神	見神	師見	王薩	來農	薩	天	神	師
くみさだめのみこと	せんじゆくわんおん	こくさう	はしひめしやうてん	あがをじんめいけん	てんけうだいし	もんじゆぼさつ	しんらんじやうじん	ふけんぼさつ	べんさいてん	むすびのかみ	だるまだいし

南午の方

面火靈主
足

尊

三三社
音尊托
勢淵陀
至陀宣
さんじやたくせん
さんそんのみだ
くわんあんせいし

未申の方

惶風吹分主
根

命

善大導
光日大
師來師
ぜんだうたいし
たいにちだいらい
まんくわうたいし

西酉の方

引導主
大戸邊

命

不弘法
行大明
者師王
ふこうみやうわう
こうぼうだいし
ねんのぎやうしや

戌亥の方

突張主
月讀

尊

八幡大菩薩
徳太子
はちまんたいぼさつ
とくたいし
せうとくたいし

以上は世界八方八柱の神なりこれより變化なさる、神佛三十六体なりこれより變化する神其の數はかりがたきを八百萬の神といふ佛法にては無量諸佛と云なり。

中央

いとなぎのみこといざなみのみこと

右二尊にて天の川を隔て、七夕の二星とあらわれ給ふ。七夕とは種苗代を守護し給ふ理なり。又田畑といふ則ち天照太神宮なり。以上十方十柱の神といふなり。

月

日

伊伊井井
伊伊井井
伊伊井井

お、いこ、ろの苦なり

天照太神宮

甘露臺地場の譯

大和國山邊郡生屋敷村中山氏の屋敷の内に甘露臺をすゑる處を地場と云ふは則ち世界中の人間の親里なるは元泥海中より月日二神あらわれましましていざなぎいざなみを引寄せ月よみ、くにさつち、くもよみ、ごかしこね、大戸邊、たいしよくてんと都合八柱の神則ち八つの道具雛形ばかりあつめて九億九萬九千九百九十九人に三寸なる土生を心魂と定めて陰陽和合の道を教へて初めて右人數を三度迄やごし込み給ふ處なるが故に三千世界の人間はみなこの地場がおやざこなるべし。月日のやしろとなりて月日の御神心入込み給ふて

六二
よろずたすけをおしへ下されるご云ふはなきにんげんやなきせかい
をこしらへたもふに、なんの形もなき道具雛形を見出し造り出した
るも同じ事にて此の度もなき事や、しらぬ事を言ふて聞して珍らし
いたすけする故にうたがひ心むりならねごこれを疑へば御利益うす
し人間はあさはかなもので我身元のはじめをしらざるなり此の世の
地と天とは實の親それより出来た人間である則ち月日二神のふごこ
ろに住居しているなりそれ故みな人間のする事は月日の知らぬご云
ふ事はなし。人間はみなく神の子供なり、我身の内はかりものな
り、これまでは病ごいへば醫者藥拜みきごうご云ふたれご人間には
八ツの心ちがいの道がある故に病の元は心からごて此の心ちがいご

云ふは、ほしい、おしい、にくい、かわいい、うらみ、はらだち、よく、
こうまん、これが八ツの心得違なり、これ我身のうちはほこりの種
なり十五歳より以下の子供のあしき病氣不事さいなんは兩親の心の
おきごころがちがうから心をなほすいけんなり、親はみき根なり、
子は枝なり、根さかゑよくば枝かれぬものにして、ますますさかゑ
花も咲き實もむすんでたのしみなり、根あしくば枝かれる事これ天
の理なり、自然の事にして、それ一家の中に一人煩へば、痛みなや
みは其の人のわずらい他人は心をくばり心を勞して煩ふなり、其の
人に心ひかれて家業もつごまらず故に家の煩ひごなる一家内の人々
心のほこりつもりかさなる故に月日二神の御いけん立腹なるべし親

神かみに助けを頼たのむことならば神かみのおしへの道みちをまもつて家内けいだいの人々ひとらみなたがいに心こころをかいろみて十五歳じゅうごさいより今迄いままででの心得こころえ違ちがひをさんげして此こゝの後のちは神かみのおしへのみちをうそ、ついしようこ、よくごこうまんなきようにして必ずかならず人ひとを他人たにんごおもわず四海かいがいみなく兄弟きょうだいご思おもふてたがいに助けをなす心こころご眞實しんじつよりいれかへてねがへば其そのの心こころを月日つきひ二神ふたかみがうけごりましくてよろずの利りやくをくださるなり。

六四

神樂勤手踊の譯かぐらづとめてをどりわけ

獅し々々
 神かみ樂ら
 一頭いとう
 同どう 男をとこ 女をんな 道みち 女をんな
 神かみ 神かみ 神かみ 神かみ
 一頭いとう 一頭いとう 一頭いとう 一頭いとう
 一頭いとう 一頭いとう 一頭いとう 一頭いとう
 祖おや

北きたの方ほうに立たて 國くに常じょう立たて 尊そん
 南みなみの方ほうに立たて 面めん足あし 尊そん
 中央ちゅうわうに立たて 伊い井い 尊そん
 中央ちゅうわうに立たて 伊い井い 尊そん
 戊亥いぬるの方ほうに立たて 月つき 尊そん
 辰巳たつこの方ほうに立たて 國くに 尊そん
 狭せま 尊そん

を象かたごる
 を象かたごる
 を象かたごる
 を象かたごる
 を象かたごる
 を象かたごる
 を形かたごる
 一ツ
 六五

男 女 男 女

神 神 神 神
一面 一面 一面 一面

四の方に立て
大戸邊尊
東の方に立て
雲讀尊
未申の方に立て
惶根尊
丑寅の方に立て
大食天尊

六六
を象ごる
を象ごる
を象ごる
を象ごる

以上十柱の神を形ごりて御守護の働きを手振して勤める人数十人なり其の音曲を合奏するは九つなり。

琴。三味線。胡弓。笛。太鼓。羯鼓。摺鉦。拍子木。手拍子。

以上九品、三品は身につく理六品は世界六臺の始まり六臺は木火土金水風の六つなり、合せて九つ心の苦を忘るゝ云ふ理なり即ち人数九人なり、都合十九人にて神樂勤めする其のあごへ右九つの音曲を合奏して六人にて十二下りの陽氣踊りの勤めをするこいふはこの泥海中にて人間を造化下さる時陽氣あそびをするを見よふごとく人間世界を造化したもふ理に依て元の姿を形をさりて神の御心をいさめるなり則ちあしきをはらうてよふきの心こいれかへてねがふならば神の心も人間の心もおなじ事故に人間みのうちは神のかしものなるゆへに神がいさみて御守護下さるなり。

安産許しの譯

此のたび月日のやしろご相成り給ふて萬ず珍らしき助け下さるに
つき、にんげん安産をねがうなり、自由用自在におゆるし下さるご
いふは、泥海中より人間を造化なさる神の御守護にて。第一に腹帯
もたれものも七十五日の間毒忌いらす身のけがれなし常の通りにて
三日目には常の通りの働き出来るなり、また、産み月をはやめ九月又
はのばして十一ヶ月にでも自由自在のここなり、即ちにんげん安産
するは月日二神の御守護にして三神をつこうて、おはたらき下さる
なり、はじめ母の胎内より縁をきりだし給ふお働きは大食天命にし

て此の神佛法にては法華經なり、又胎内より引出し安産くださるは
即ち大戸邊命にして此の神佛法にては眞言大日經なり後の皮つなぎ
下さるは國狹槌尊にして此の神佛法にては禪宗の始めなり、世界の
動物始めは此の神の御苦勞にて月日二神が此の三神を以て御働き給
ふなり故に、人間おりくなんさんするはこれ、なん病おもきにあ
らず、平常におのれが氣ずい氣まゝして兩親にさからい夫にくちご
たへして、嫉妬心深く口先のみにして心に人道をまもらず故にりう
さん、なんさんのうれいを見るもみな親の心へちがいから月日二神
の御いけん立腹なり。嗚呼恐るべきは天理なり守るべきは人道なり
天地間萬物の靈長と生れてはよろず天理にしたがふべし守るべし。

農事たすけの譯

第一には雨乞第二には芽出しのお札にして第三には實のり充分な
るようの御札第四には悪しき害虫よけの御札第五には作物肥への授
けなり。此の肥といふはぬか三合に灰三合土三合都合九合を調合し
て用ゐる時は肥シ一駄の替りとなる之れ月日二神と引出の神大戸邊
命を以て御働き下さるなり、此の助けをおや神に願ひ受けたる事な
らば神のおしへを守りて慎むべし。もし人道に違ひ背きし時は其の
功は更になし、右お守札は千枚すりて壹座の勤めをする、又こやし
壹駄を調合して九合を以てこれを百駄づゝ壹座の勤めをするなり、こ

れみなほごこしする事なるべし。尤も勤めは神樂十二下り手踊り陽
氣づごめなるべし。

七一

赤き服の譯

今爰に月日の社となりたもふて中山みきの赤き衣服を着用するご
云は、天の照護の如く月日天に顯れて照護下さるは二神の眼なり、
眼は明かなるがゆへに世界中大に明なり、即ち赤き衣服には二神
の御心、こもりたもふそれゆへに萬事を見るなり、此の社となり給
ふみきの姿は同じ人体なれごも心魂は元泥海中にて人間造化なされ
し時母おやの雛形ご成り給ふいざなみの命の魂なるゆへに何國何方
の人もみな、たすけたいが一條なり即ち元泥海中の約束の通り九億
九萬九千九百九十九年の年限が満たるゆへに元はじまりの地場へ現

七四
して人間ご生れたまいて即ち此の人を雛形として月日二神の御心を
入りこみて此の人の口をかりて元、始まりのおはなしを教へ下さる
なり世界開闢以來なき珍らしき助けの道を教へ下さる故に親里なり
世界中の人界の産土の地場なるべし、此の生れ古郷へ参りておや神
に萬ず助けを願ふならば、やしろごなりし人のお心を見て、雛形と
して我が心をば、しんじつ八つほこりをはらいつゝしみて人道を生
涯心にたしなむといふて願ふならば月日二神が其心を納受したま
てよろず利益を下さるなり、人間病といふて更になし皆名々の心の
ほこりがあらわれやまいなやみごなる。人間死ゆくなぞご云ふなれ
ご死るでない、かりものを返やすばかりの事にてあるべし。此の譯

を衣服にたごへて話しするいかほご大切の衣服にても穢あかつきた
るなら我身きて心あしく、速にぬぎすて、ごきほごき水であらふて
火でほして仕立てあげて着て氣がよろし、にんげんも我五体は神の
かりもの心のほこりつもの故に神がぬぎすてたもふ故なり、我身の
内胸三寸をばあらうのには神のおしへのみちをば我が耳にきゝて心
にもちる胸のうちをよくあらふてねがへば神の受取下さる事うたが
いなし、此の世界に神や佛の姿を木や金土石にて造化したれごもこ
れみな人間のこしらへたるものなり、人道を守るそのために勸善懲
惡をさごしみちびき下さるは我が心の目的なり此の世の水ご火ごは
一の神、風も神いかなあしきもふきはらふなり。

かんろうだいで
甘露臺出てからの御歌
みかぐらうた

一 ツ ひのもごやまごにてやまへごふりのしよやしきに
二 ツ ふしぎこのたびうまれ子にあたへあるのがめづらしい
三 ツ 三日めへよりかんろふが天よりをりたさいふわいな
四 ツ 世にさがりたるかんろふがじゆみよくすりであるわいな
五 ツ いつもくすりはあるかいなこれはさきなるためしやで
六 ツ むねのわかりたしよふこふにてんのあたへがあるのやで
七 ツ なにかてんりがかのふたらめづらしたすけがあるものや
八 ツ やしきのうちへはへるならいかなものでもこいしなる

九ツ このたびまではしらなんだもごなるじばやおやごごや
十ド このたびいちれつにこきようたづねてくるわいな

一ツ ひろくもんよりさしかけてほんやのもよふをしょやないか
二ツ ふしんするならじごりからみさだめつけにやいかんでな
三ツ みればよふばがじやまになるごこへなをしてよかるふぞ
四ツ よふは一ツでいかにでな三ツ四ツはせにやならん
五ツ いつまでしやんとてみてもいづれよふばがじやまになる
六ツ むりにごれへさいわんでなこゝろさだめてごるがよい
七ツ なんでもたちものごりはらいあさいたてるがよいほごに

八ツ やしきないごはおもふなよもこのやしきがあるほごに
九ツ このうちにいつまでもおいてもらをこおもへごも
十ド このたびせひがないやかたもろをてたちかへる
一ツ ひろくにたきばしよをはやくじごりをするがよい
二ツ ふしぎなふしんであるほごにうちのまゝにはならんでな
三ツ みないちれつをかみがしはいをするほごに
四ツ よりくる人があれこれごはなかけするであろふから
五ツ いつもだんくくるごてもたいぎさすのやないほごに
六ツ むりにごなたにもたのみかけるやないほごに
七ツ なんでもしんじつかみさまのまじわりさしてもらひたい

八 ツ やがてふしんにかゝれどもたのみもかけずさめもせず
 九 ツ こゝまでだんくひはたてごじつにわかりたものはない
 十 ド このたびしんじつにたしかなりやくがみゑました

にほんこうき

明治十四年巳歳

このよふのほんもごなるはごろのうみ
 もごなるかみはつきひさまなり
 それよりもつきさまさきにくにごこそを
 みさだめつけてひいさまにだんじ
 それゆゑにくにごだちのみごさま
 このかみさまはもこのおやなり
 これからはせかいこしらぬにんげんを
 こしらぬようこそをだんきまり

にんげんをこしらぬるにはそれづくの

ごをぐひながたみだすもよふを
みすませばごろうみなかにみねてある

うをさみいごがまじりいるなり
このうをはかほはにんげんからだには

うろこなしなるにんげんのはだ
それゆへににんぎようごいふうをなるぞ

みすますごころひごすじなるの
こゝろみてしよちをさしてもらいうけ

これにしこむるごをぐなるのは

みすませばしやちほごさてへんなるの

いきをいつよくこのせいをみて
もらいうけてしもうてはこのものゝ

こゝろあじわいひきうけなして
おごころのいちのごをぐにしこみあり

にんげんなるのほねのしゆうごう
このうをにくにごこだちがいりこんで

ふうふをはじめにんげんのため
それゆへにかみなをつけてだいじんぐ

これなるかみはいざなぎのかみ

このかみはここにいますごをもふなら

とうねんみいの十と六さい

ぞんめいでをわしますなりこのかみは

もこのやしきのいちのかみなり

みいさまわしろくちなさてはだあいは

にんげんなるのごさくなるなり

そのこゝろまつすぐなるをみさだめて

これをひきよせしよちをさして

まだほかをみすますればかめがある

このかめなるはかわつよくして

ふんばりもつよくてこけぬこのものを

しよちをさしてくてもふなり

そのこゝろあじわいをみてをなごうの

いちのごをぐにしこみたまいて

みいさまにひいさまこゝろいりこんで

ふうふをはじめにんげんなるの

なはしろにつかふたこれでいちのかみ

いざなみのかみいせではげくう

このかみはにんげんなるのもこのをや

このおやさまわごにござること

おもふならさうねんみいの八十ご

四さいにてこそやまへのこをり

しよやしきなかやまうじごいふやしき

ぞんめいにてぞをわしますなり

あらわれておわしますなりこのをやは

このよふにいるにんげんのをや

またかめはにんげんのかわつなぎにも

つかうたごをぐこれにかみなを

くにさつちこのかみさまわをやさまの

たいないこもりだきしめござる

ここしから三十年たちたなら

なわたまひめもこのやしきへ

つれかへりそのうゑなるはいつまでも

よろずたすけのしゆごくださる

つきよみはしやちほこうなりこれなるは

にんげんほねのしゆごふのかみ

このかみはさうねんごつてみいの六十ご

一さいにてぞあらはれござる

くもよみはうなぎなるなりこのかみは

にんげんくいのみしゆごのかみ

このかみはさうねんみいの五さいにて

ぞんめいにてぞおはしますなり

かしこねはかれいなるなりこのかみは

にんげんいきのしゆごうのかみ

このかみはさうねんみいの八さいにて

ぞんめいにてぞおはしますなり

たいしよくてんのみこさはふくなるぞ

このものこゝろあじはいをみて

にんげんしにいきのさきゑんをきる

これはこのよのはさみなるかみ

このかみはさをねんみいの三十さ

二さいにてこそおはしますなり

おほこのへじきもつのかみこのかみは

くろぐちなさてひきだしのかみ

このかみはさをねんみいの十六さい

ぞんめいにてぞをわしますなり

にんげんのたましいなるのはごろうみに

いたごじよふこのこころみて

みなものしよちをさしてもらいうけ

くてそのこゝろあぢわいをみて

このやつつにんげんたましいごをぐなり

これにみなみなかみなをつけて

にんげんのこかずはくをくくまんにて

くせんくひやく九十九人や

このねんをたちさるならばいんねんの

もこのやしきゑつれかゑりてぞ

よふきなるゆさんあそびをさせますご

つきひさまよりやくそくをなし

いまここでもこのかみがみにんげんで

みなぞんめいであらわれている

これまではこのをやさまのでるまでは

わがからだをばわがものなるご

おもっていたところちがいやこのたびは

をやさまよりのをしゑをきいて

はつめいしてしんじつところまことをご

おもふところはかないのこらず

かりものはめへうるをいごぬくみご

かわつなぎごしんのほね

のみくいやでいりなるもいきなるも

これみなかみのかりものなるぞ

このことをうたがふものはさらになし

これうたがねばこりやくうすし

かりものをまことしんじつをもふなら

なにかなわんこいふことはなし

このやしきにんげんはじめもこのちば

ここはこのよのをやざこなるぞ

このよふのもこのやしきのいんねんで

もこのごをぐをうまれござるで

それをばなみすましたまひ四十

五ねんいぜんにあまくだりあり

にちにちにおはなしありたそのことを

くわしくふでにしるすものなり

にんげんのいちのごをぐはかめなるこ

しやちほことをこれみのうちゑ

これよりも九おく九まんご九せんにん

九ひやく九十九人こかづを

これちばでみつかみよさにやごしこみ

さんねんみつきごごまりありて

これよりなやまごのくにのならばせの

ひちりのあいだなぬかかかりて

うみをろしのころやまごはよつかにて

うみをろしありこれでかみがた

やましろふいがかわちへごさんがこく

十九にちにてうみをろしあり

そのあごは四十五日であごなるの

のころくにぐにうみをろしあり

これゆへに七十五日おびやうち

うみをろしたるちばはみやこふ

にんげんはごぶからうまれごぶごぶご

せいじんをしてさんずんにては

はてましていざなぎさまはこれにてぞ

をすぎましますこのあごなるは

いざなみのみこさまなりそのはらに

いちごをしゑたこのしゆこうにて

またをやにもこのにんじゆうやごりこみ

十つきたちたことなるならば

このにんもごぶからうまれごぶ／＼ご

せいじんをしてさんずんごぶで

はてましてまたもやおなじたいないに

もこのにんずうさんごやごりた

このものもごぶからうまれだんだんご

四寸になりてまたはてました

そのごきにいざなみさまもよろこんで

につこりわらふてもうこれからは

五しやくのひごにわなるごをぼしめし

おかくれましたそのねんげんは

このねんは九十九年のあいだなり

三ごながらも九十九ねんや

一二ごめのうみをろしたるばしよふは

はかじよなりさんごめなるは

さんばらやそこで一みや二はかなり

さんごさんばらこれまいりしよ

これよりはごりけだものやちくるいに

八せんやたびうまれかわりて

それゆへにひごなるものはなになりご

まねをでけますここであるなり

このあいだたちたるならばそのあごは

つきひさまよりまたごしゆごうで

さるなるをいちにんのこりこれなるは

くにさつちさまこのはらにてぞ

にんげんをさこ五にんおなごふを

五にんつごふ十人づつを

やごまりてこれもごぶからうまれでて

八寸のさきみづつちわかり

一しやく八寸のさきうみやまも

てんちちつげつわかりかけたり

一しやく八寸まではひさはらに

十人づつうまれでるなり

これよりは三じやくまでは一さはらに

おそこひごりさおなごひごりさ

ふたりづつうまれでたなりこのにんを

三じやくにてものをゆいかけ

それゆゑにいまにんげんも三さいで

ものをいひかけちゑもでけます

これよりいまにおいてもひさはらに

一にんづつさだまりなりし

このにんを五しやくなるにうみやまも

てんちせかいもみなでけました

みづなかをはなれましてちのうへに

あがりましてそのさきまでに

せいじんにおをじてじきもつりうけいも

ふじゆなきよふあたゑあるなり

だんだんじきもつにてはくいまわり

からてんじくへあがりゆくなり

にんげんをさずけたかみのしよこには

おびやいちじよあらわれてある

このはなしやごりこむのもつきひさま

うまれでるのもつきひごころふ

うむごきのしゆごふくださるかみさまわ

たいしよくてんこれなるかみは

たいたいのゑんきるかみでほうけきよ

おおこのへのかみさまなるは

うむごきのひきだしのかみしんごんで

うみだしたあごしまひつなぎは

くにさつちのかみさまでぜんしゆで

このさんじんはあつけんみようをう

このみかみおびやいつさいごころふで

おびやゆるしははらをびいらす

もたれもの七十五日このあいだ

ごくいみいらすこのさんしきを

ゆるしありつねのからだでけがれなし

おびやゆるしはこのやしきにて

ゆるしだすこれはこのよのにんげんを

はじめかけたるおやのやしきで

このやしきさんぜんせかいこのように

ほかにあるまいうまれこきよう

にんげんをやごしこみたるやしきなる

しよこあらわすたすけみちあけ

にんげんにやまいごいふてなれども

こころちがいのみちがあるゆる

このみちはぼんぶこころに入ツあり

ほしいおしいごかわいにくいご

うらめしごはらだちよくごこうまんど

これが八ツのこころちがいや

このちがいみのうちなるのあしきいの

たごゑはなしのむねのほこりや

このほこりつもりかさなるそれゆへに

やまいなやみもうれいさいなんも

なにもかもみのうちしゆごうかみさまの

こころなをしのいけんりつぶく

一れつにてんりさまをねんじるは

八ツのほこり十五さいより

いままでにはこりつけたとおもふこと

こゝろしんじつざんげをいたし

ほこりさへすきやはろたことなれば

やまいのねねはきれてしもうで

ほかなるによろずたすけもうなじこと

かないのこらずこゝろすまして

ねがふならかないむつまじにんげんを

たがいにたすけるこゝろあるなら

このこゝろかみさまよりはみわけして

よろずたすけやこりやくふかく

このよふもにんげんなるもでけたのは

つきひさまよりごしゆごうなり

このもごをしりたるものはさらになし

てんはつきさまちはひいさまや

このせかいてんちちつげつおなじこと

ちいとてんごはじつのおやなり

ちちははといふのはてんちふうふや

なむといふのもおなじことなり

あごなるはごをぐしゆうなりにんげんの

ごたいのこらずかみのかりもの

かみさまのかりものなるはいちにがん

これはつきさまかりものなるで

このうちのぬくみいつさいひいさまの

かりものなるぞみれなむごいふ

かわつなぎくにさつちなるかみさまの

かりものなるぞしんのほねは

つきよみのみごさまのかりものや

これであみなりのみくいであり

くもよみのみごさまのかりものや

これで五りん五たいごいふなり

いきふくはかしこねさまのかりものや

いきでものいふかぜでふきわけ

これこそはなむあみだぶご六たいや

きるかみさまわたいしよくてん

あごなるはおほこのべのかみさまは

りうけひきだしひやくしようのかみ

このかみもよりあつまりでござるゆる

ほういはつぼうゆるとまします

このうちにひがし三じんおんながみ

にし三じんはおごこかみなり

たつみいはくにさつちさまぶつぼふの

ふげんぼさつにだるまべんてん

いぬいはつきよみのかみぶつぼうの

はちまんぼさつしよごくたいし

ひがしいはくもよみのかみぶつぼうの

もんじゅぼさつにりうをふしんのふ

やくしさまくすりのしゆごふいしやごもに

しよもつもんじもちあもごしゆごにう

ひつじさるかしこねのかみぶつぼうの

だいにちさまにほうねんさま

うしごらはたいしよくてんぶつぼうの

こくぞぼさつみよけんさま

きごぼじんはしづめさまごしゆうらいご

あがたさまごはおなじことなり

にしごりはおおこのへさまぶつぼうの

ふごをみよおふこをぼをだいし

このやしきにんげんはじめもごのかみ

おはしますすゆゑよろずたすけを

このよふをはじめてからにいままでは

このたすけをばできぬここから

これまではいしややくすりもにんげんの

しゆりこゑにてこしらゑありた

これからはいしやもくすりもまじないも

おがみきこうもいらんここやで

かみがみのおがみきこうやうらないや

これにんげんのおんのほをじば

かみさまのおはなしきいてしやんして

しんじつこゝろかのたここなら

なににてもかなわんここはなけれども

こゝろちがゑばくすりのむなり

にんげんはしにゆくなごいふけれご

しにゆくやないかりものかやす

かやすのはみのうちほこりつもるゆゑ

みのうちかみがしりぞきなさる

このことをきものにたごへはなしする

こゝろのよこれあらわぬものは

あらわねばきていることができぬから

なんぼおしてもぬぎすてるなり

きものでもなんぼよこれであるごとも

みずであらゑばきてきがよろし

にんげんもこゝろのよこれあろたなら

かみもよろこびしゆごうくださる

にんげんはしぬるこいふはきものうを

ぬぎすてるのもおなじことなり

かみさまわおはなしばかりでにんげんの

こゝろのよこれをあらいなさるで

このはなしみずごかみごはおなじこと

よこれたるものあらいまする

たすかるもこゝろしだいやいぢれつに

はやすこゝろをすますことなり

317
683

大正十四年十一月十日第一版
昭和二年一月二十日第二版
昭和三年四月二十日第三版

編輯者 奈良縣丹波市町三島 安江

發行者 天祐安江社

印刷人 淺野好三郎

印刷所 白馬堂印刷所

神戸市布引町二丁目二十三番屋敷



終

